



佳作

書評 片倉もとこ著『イスラームの日常世界』（岩波書店 1991）

（中央新書・文庫コーナー：岩波新書 新赤版 154）

文学部 3年 柳井 孝太

「イスラーム」という言葉を聞くと、テロや暴力、女性差別を連想してしまうのはなぜだろうか。それは、日本人が西洋の目線や価値観で物事を考えているからに他ならない。

「自分の目線」でイスラームについて考えれば、新たな世界が見えてくることだろう。この本は、「自分の目線」を獲得するための手助けとなる一冊である。

本書はタイトルにもあるように、人々の日常世界に焦点を当てながら、イスラームの本質に迫っていく。宗教というと難しく曖昧で、怖いもののように考えがちだが、イスラームは人々の日常世界に完全に溶け込んでいる。聖典である『コーラン』は、生活のルールブックといっても過言ではない。本の中から興味深い一節を引用したい。「イスラームは、『宗教』という言葉に、どうもびったりしないといわれる。なぜならイスラームは、その信念体系のうえにきずきあげられる生活の全体、文化の総体をさすものだからである。」つまり、イスラームは宗教という枠を超えた、一つの生き方なのだ。

イスラームの教えの中でも、日本人が特に疑問に思うのは、「イスラームは女性を差別しているのではないか？」ということだろう。確かに、一見すると女性差別のような教えが存在する。「四人妻」や「ベール」がその代表例だ。

しかし、西洋中心の目線を捨てると、独特でおもしろい考え方があらわれてくる。まずベールについては、「性的誘惑に対しては、男は、とくに弱いから、女は、髪の毛をおおう『ベール』を着けて弱き男性をまどわさないように協力する。」という本の一節が、端的に事実を言い表している。つまりは、「男は狼だから気をつける」ということだ。男性が信用されていないともいえる……。 「女たちは、これをかぶることにより、『見られる女』から『見る女』に変身する。」「仮面舞踏会のように『匿名の解放感』がえられるのも、わるくはない。」こうした著者の主張からも、ベールが女性にとって、どのような存在か知ることができるだろう。

「四人妻」に対しては、このように反論できる。「日本は一夫一妻だが、本当に守られているだろうか。」「婚姻外の性交渉で生まれた子供が差別的な扱いを受けることはないだろうか。」確かに、イスラームでは男性は四人まで妻を娶ることができる。ただし、そこには厳しい条件がある。複数の妻やその子供を、平等・公平に扱わなければならないのだ。精神的にも肉体的にもほぼ不可能だろう。金銭的にも負担は大きい。そもそも、この「四人妻」という制度は、戦争などで夫を亡くした女性やその子供を救済する目的で生まれたといわれる。歴史的にも、妻を複数もつ男性は例外的な存在だった。つまり、「四人妻」は決して男性に有利な制度ではないのだ。恐妻家の人ならば身に染みてわかるだろう。

この本を読めば、イスラームを見る「自分の目線」を手に入れることができる。メディアに惑わされず、「自分の目線」で物事を考えたい人には是非とも読んでほしい一冊である。